
リストカット・ラヴァー

太郎鉄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リストカット・ラヴァー

【Nコード】

N2276B

【作者名】

太郎鉄

【あらすじ】

俺は手首を切るのが上手い。職人クラスの腕の持ち主。俺が切るのは俺のじゃなくて美智子の手首だ。俺は美智子が何で手首を切るのか知らないし、知りたくもない。でもその内聞いてしまいそうな俺がいる。そんな事に意味なんていちいち求めても仕方がないのに、美智子の事は知りたくなる。俺は馬鹿だ。どうしようもないマザーファッカー。聞きさえしなければ、恐らく何も変わらないのに何で俺はバンドラの箱を開けたがる？美智子は切られたがり、俺は切るでいいはずなのに。面倒だ。誰か答えを教えてくれ。プリーズ、ア

スクミィ。

1（前書き）

短めの連載になります。十話以内に完結する予定ですので、気軽に暇潰しに読んで頂けたら幸いです。

眠い。眠いけど眠れない。アイウォントスリープ。まったく、不眠症つてのは厄介な病気だ。

いやいや、そもそも眠れないって病気なのか？ 俺は考える。だいたい今の世の中何でもかんでも病気にしすぎで別にそれって俺から見たら健康だぜって事まで病気で病気で病気すぎやしないだろうか？

大概こんな事を考えてると知らない内に眠れるんだが、俺はただいま俺を知ってるからつまり起きてる。

仕方あるまい。俺は枕元に置いてある携帯を手取る。

TEＬった。

「もしもしハロー」

「今何時だと思ってるんだい真壁君。^{まかへ}正直、少々憤慨だね」

憤慨と言いつつ、ドクター・ラブノウはクールな口調。

「いや、それは判ってるんですけどね、寝れないんですわ。たまにないんすわ。明日早いのに寝れないって辛いでしょ、ラブノウ先生」

「まず、僕の事は愛知と呼びたまえ。^{あいち}眠れないならハルシオンでもがぶ飲みしたらどうだい」

「ラブノウ先生、そんな冷たい事言わないでよ。俺がドラッグ駄目なの知ってるでしょ。ハルシオンよりラブノウ先生の愛を求めているわけです僕」

「駄目だ」

「何故」

「眠い」

埒があかないので電話切って起き上がって部屋を出て隣の部屋のブザーを連打してやった。

ワン、ツー、スリー、し、五回目で扉が開く。ドクター・ラブノウがくたびれたパジャマ姿で俺を睨みつけていた。無精髭が軽くキモい。つかラブノウ細すぎる。身長は百七十くらいだけど体重は四十数キロといったところ。

「僕は眠いと言ったはずだが」

「僕も眠いの。だから辛さが解るでしょ」

目の下に大きなクマが出来ていても、そんなハンデをものともせず俺のスマイルはラブノウのハートをがつつり射抜いた。

「さつさと上がってさつさと帰ってくれ」

アイラブラブノウ。俺は彼に投げキスをした。ラブノウが忌々しそくに首を振る。ラブノウったら照れちゃって。ハートマーク。

ラブノウは間抜けな魔法使いだ。魔法が使えるのに間抜けというのは実に致命的であると思う。

どのくらいラブノウが間抜けかというと、実に数十の出会い系サイトに登録して何百万もサクラにぼったくられて、その上でようやく出会えた本物の女子高生と魔法を使ってさあエッチって時に、部屋の鍵をかけ忘れてるあたりがマジで間抜けだ。

このマンション、壁がめちゃくちゃ薄いのだ。なんだか隣からあんきゃんきゃんプツシーキャットな声が聞こえたから俺はむかついて壁を叩いたけど止まなかったで、ついつい隣の部屋の前まで行って扉をガンガン叩いたら開いちゃったから侵入した。それが俺とラブノウの出会い。

玄関で靴を脱ぐとキッチンが見えて、その先の扉を開けると二十平米くらいの狭い部屋に本やらビデオやらが山積みになっててさらに狭くって、その中心でラブノウがお尻丸出しで女子高生に乗り掛かってた。

『ヘイヘイエテモンキーズ！ 昼間っからセックス三昧大いに結構。だがしかしバット、お前らちよつと声がでけえ。ハスキーボイスはブルーハーツだけで充分なんだよ！』

お尻丸出しラブノウは振り返って俺を見つめる。顔は真っ青。おちんちんが見えた。残念ながら真性包茎の上に短小だった。

女子高生もゆっくりと起き上がる。目に焦点が定まってない。空虚な瞳。ハートレス。

『ななな、なんだね君』

『隣人を愛すべし。真壁尚太郎様だ』

女子高生をもう一度ルック。ミニスカートがめくれあがってお毛毛がちらりと伺える。宙を泳いでいる彼女の視線が、徐々に俺に定まり、そして完璧に定まりきる。

女子高生は目をこする。俺を見る。ラブノウを見る。ラブノウの真性包茎と自分のめくれあがったスカートをみる。んで叫ぶ。

バタバタバタバタ。女子高生はわけもわからず起き上がって走り出してパンツを忘れていく。

その後ラブノウは口止め料として三十万円女子高生に払って刑事罰を免れる。俺に弱味を握られたことくらい些細なもんだ。よかつたね、ラブノウ。

「それじゃ、よろしく」

俺は本を適当に片付けてスペースを作つてあぐらをかく。ラブノウは秒間三発の舌打ちで応戦する。もうすぐ四十になるのにラブノウは可愛すぎる。

「いいけど、すぐ寝るなよ。ちゃんと帰ってくれたまえよ」

「もちろんさラブノウ。明日は早いんだ。こんな所で油を売る訳にはいきません」

ラブノウは対面に座り、人差し指を俺の目の前に突き立てる。振り子の如く揺らしてくれる。俺は指の動きを目で追った。うつらうつら。トロリトロリ。眠いよラブノウ。さすがラブノウ。欠伸がたまくる。意識が途切れる。おいおい寝るなっていう声が聞こえたけど、それは無理な相談だい……プツッ。

意識の断片を繋ぎ合わせて覚醒しようとする俺。暗闇にガラス片のような尖ってギザギザな透明の板がいっぱい浮かんで、それに美智子^{ちこ}がいっぱい映ってるというか美智子しか映ってない。オール美智子。つまり美智子イズオール。

俺はガラスの美智子を摘んで摘んでかき集めて一つにまとめる。するとガラス片が鏡くらいの大きさになって、でかくて全裸の美智子が両脚を広げてファックミーと呟く。美智子の手首は傷だらけで真っ赤な血がだらだら流れてる。気持ちよさそうに美智子は笑う。ファックミー。イエス、ファックユー。

俺は美智子とセックスしようとするけど相手は本当は美智子じゃなくて鏡だから出来ない。んで美智子象が歪み出して少しずつラブノウに変わる。なんたる不条理。さすが夢。さすがナイトメア。というわけで起きる。

「冗談じゃない」

開口一番ラブノウは言う。俺は携帯の液晶で時間を確認する。午前七時。シット。

「冗談じゃねえ」

俺はキレル。ラブノウは不機嫌そうに煙草を吸っている。俺は煙草がキライなので取り上げて灰皿に押し付ける。グシャグシャ。

「だから、帰れと言ったじゃないか」

もう一本煙草を取り出すラブノウ。俺は立ち上がり、台所で顔を洗って洗面所で歯を磨く。

「人の歯ブラシを勝手に使っくな！」

「うるへえ。（ゴシゴシ）ほんはほほひ、あはめひつくっへらふのう」

「何を言ってるんだ君は」

「ガラガラガラガラ、ペツ！ 朝飯つくってラブノウ」

「君、僕から寢床を奪っておいて……」

ラブノウは右手で頭を抱える。でも左手はすでに本やらビデオの山を片付け始め、やがてちっちゃいテーブルを用意してくれた。

「カップ麺しかない。嫌なら出て行きたまえ」

だから愛してるんだ。大好きラブノウ。キモいけど。

俺は豚骨味の即席麺を無理矢理胃に押し込んでラブノウの部屋を出る。エレベーターに乗ると三階の佐藤さんと相乗りになる。

「あら。真壁さん。早いよねえ」

五十代主婦の佐藤さんは大きなゴミ袋を二つ手に提げてにっこり笑う。ちなみに佐藤さんは主婦だけど男だ。ゴリゴリのメンズだ。顎髭が全力で伸びまくってるし肩幅はプロレスラー並だし声はハリウッド映画のダンディな主人公の吹き替えだ。

「でも今日は完全に遅刻です。やってしまいました。最悪のミステイクです」

「大変ねえ」

佐藤さんは当たり障りのない会話が好きなのでこれ以上話は進まない。エレベーターが止まる。佐藤さんが『開く』のボタンを押してレッツゴーを促してくれる。

俺はお辞儀をして走り出す。雨が降っていて憂鬱だけれど、今日は久し振りに美智子と会えるからまあいいや。

さて、仕事に遅刻した俺は現場でスタッフから冷たい眼差しをガンガンに浴びせられる。俺は愛想笑いで両手を合わせる。

「ごめんごめん。実は遠い親戚がカリフォルニアでマフィアに撃たれて国際電話で俺に助けを求めてきたんだ。仕方ないから瞬間移動と亀仙流でマフィアのアジトを壊滅してきたんだけど実は奴らのバックにはレッドリボン軍が控えてて……」

学生とフリーターの兄ちゃん姉ちゃんが目を細める。まったくもって俺の言い訳になど興味がないらしい。可愛げもなにもありやし

ない。

俺は搬送会社の運ちゃんとか合流してフリーペーパーの束を三つ受け取って滑車に乗せて二人の元に戻る。

時刻は八時五分前。秋葉原駅から人の波が押し寄せてくる。

「んじゃちゃっちゃと配って終わりにしよね」

新しく出来た電気街口の前の広場の隅っこに束を置く。

「そこに置くんじゃないよ！」

くそばあな声が鼓膜を破りそうになる。

「そこはあたしが使うんだよ！」

宝くじ屋のばあがそこら辺に落ちてる塵を拾って投げつけてきた。俺はボレーシュートで応戦する。ばあは嫌いだ。じじいの次にばあが嫌いだ。

俺は唾を吐き捨て、束を広場の中央に運ぶ。スタッフの二人が溜め息をついていた。

「はい、気にしない。撒ききつたら終わりでいいから頑張ってね」
返事もせず、二人は束の紐を解いて十冊ずつフリーペーパー持って人の波へ消えていく。

「無料情報マガジン、クーポンワールド本日より最新号です」

ま、仕事はしっかりやる奴らだから返事しないくらい大目に見てやる。

俺は美智子にモーニングコールを入れた。眠たそうな声が聞こえてくる。

「おはよう」

「やあ、随分機嫌が悪そうだね」

「朝は弱い」

「知ってるさ。だからこそ俺がモーニングコールを入れる」

「そうね。こんな早朝から真壁以外の声を聞いたら発狂してしまうもの」

「今日も一日頑張っておくれよ」

「真壁もね」

「約束通り、七時に部屋で待ってる」

「行くわ。行かないわけがないでしょ」

美智子に念を押す必要はない。解ってる。だけど俺は念を押してしまう。無意味だけど、言葉だけでも確実さが欲しいんだ。俺は美智子に首ったけ。

「それじゃ切るわ。電話ありがとう」

電話が切れる。俺は広場のベンチに腰を降ろして、バイト二人が撒き終わるのを待った。

マンションのベランダから見える景色は新宿の高層ビルの群れ。光りまわっている。あれが全部ぶつ壊れたらさぞかし気分がいいだろう。俺は夜にキラキラしてるものが嫌いだった。

携帯の液晶を見る。七時半——美智子が来るまであと三十分。俺は部屋の掃除を始める。美智子は恐ろしいまでの潔癖症だった。そのくせ《汚す》のは好きなのだ。なんたる矛盾。まるで世界の在り方みたい。ライカワールド。

掃除とはいっても俺の部屋は狭いし家具も必要最低限しかおいてないから、する事はせいぜい床に落ちてる埃をせっせとかき集める事くらいなわけだ。水場は完璧にピカピカ。そもそも食器が存在してない。飯なんてインスタントで充分なのだ。

というわけで二十分近く持て余す。ちなみにテレビすら俺の部屋にはない。俺もある種の完璧主義。いらないものは徹底していらない。その代わり、いるものは徹底して欲しがる。

美智子が来た。ジャスト八時。美智子は時間より早く来た事も遅く来た事もない。

俺は美智子を包容する。ハグハグする。耳たぶを噛もうとする。押しのけられる。

「玄関じゃムードが出ないでしょう真壁。相変わらず、犬みたいね」

「わんわん」

美智子は俺を無視して靴を脱ぎ始める。今日の美智子の服装――スニーカーにジーンズ。上は白のダウンジャケット。美智子は飾らない。化粧もほとんどしていない。髪はショートで真っ黒。この格好だと遠目から見たらかわいい少年に間違われるかもしれない。

美智子はリビングのベッドに腰掛ける。ベッドの前には俺が用意したおざなりの真っ白で小さなテーブルがある。

「何か、飲みたいわ」

ダウンジャケットを美智子が脱ぐ。

下には紺のセーターを着ていた。俺は美智子のおっぱいに視線をやる。美智子のおっぱいはいい。デカすぎず小さすぎずのCカップ。何より形がパーフェクトだった。全世界のおっぱいの見本といっても過言じゃないくらいの美乳。いや、あくまで俺基準の話だ。この瞬間において、世界は俺を中心に回ってる。

「真壁、聞こえなかったの？」

「アイアイサー」

俺はキッチンの隣の冷蔵庫から缶ビールを取り出す。美智子は飾らない。シャンパンよりビールでいい。ドンペリやロマネコンティよりも安っぽい発泡酒を好む女だ。

テーブルの上に缶ビールを置く。プシュッシュワシュワ。ゴクゴク。カタン。美智子は飾らないが、ビールを飲んでもブハァーとは言わない。最低限の色気は守る。だから俺は美智子のスレイブ。

「する？」

「する」

淡泊。簡潔。美智子はパツパツとセーターを脱いでカチャッとベルトを外してジーンズを脱ぐ。下着は白。特に装飾はない。

俺は美智子の左腕を取る。脈と脈の間についた傷は細くて白い線になって完全に塞がっていた。俺のワークスに抜かりはない。

再びキッチンへ。引き出しから新品のカッターを取る。コンロであぶって軽く消毒する。

美智子の目がトロンとしている。俺じゃなくてカッターにメロメロだった。俺はカッターを叩き壊したくなる。

美智子の息遣いが荒くなる。俺は微笑んで美智子に近付く。

「これはまったくの愚問だけどさ」

俺は切り出す。

「美智子は俺を愛してる？」

美智子の視線はカッターに釘付け。

「愛してないわ」

俺の視線は美智子の手首に釘付け。

「そのカッターの刃先ほどにも」

たまらない。

俺は美智子の手首を切る。脈と脈の間のギリギリのラインをスパッと切る。深すぎず、浅すぎず。ぴゅーと血が出た。美智子は喘ぐ。叫ぶ。言外にファックミーと俺に伝える。手首から出た血を下着に塗り付ける。下着を外しておっぱいに塗りたくる。ブラッディー美智子。俺は勃起する。電気も消さずに美智子と交わる。

愛してる美智子。

俺は腰を振りまくる。

ワンツーワンツー。

規則正しく、時には規則を乱しまくる。

俺は日本人には珍しいズルムケだ。そんな俺でもこの摩擦に時折包皮がいかれそうになる。美智子は締まる。血が出れば出るほど締まる。締めれば締まるほど俺の何もかもが美智子でがんじがらめにされる。額から汗が滲んでる。真っ赤な美智子の胸にポタポタ落ちる。俺の汗なんかじゃ美智子から赤を拭い去れない。

「好きだ好きだ大好きだー」

たまらず俺は叫んでしまう。

美智子の顔は恍惚として舌とかベーッて出してるから俺は腰を振りながらしかし美智子の舌に舌を絡める。唾液でブツチャブツチャになる。俺の声は美智子に届かない。俺の声が美智子に届いた事一度もない。だから俺はせめて唾液を美智子に届ける。そんな事に意味なんてない。解ってる。そんな事は解りきってる。

シートはすっかり真っ赤だった。

俺は美智子の左腕を治療して包帯を巻く。美智子の手首は切られなれてる。治癒は早い。次のセックスは来週の半ばくらいかな。

「すつきりしたわ。ありがとう真壁」

帰り支度を終わると美智子は言った。俺は美智子が鉄で出来ていないんじゃないかと思う。だって美智子の声にはトーンというものがない。表情にはパターンがない。全てが統一されて平坦なんだ。手首を切ってセックスする時以外を除いて。

でも美智子には血が流れてる。俺が美智子の次にそれを知ってる。だから俺は安心する。サイズズヒューマン。サイズズウーマン。俺は笑う。ガチガチに無理して美智子に笑いかける。

「また、ね」

「明日は休みだから、コールはいいわ」

「そうか。実は俺も運命的に明日は休日なんだよね。よかったらたまにはロマンチックに二人でノーマルなデートを楽し……」

玄関で美智子はスニーカーをささつと履いている。バイバイも何もない。バイバイの代わりにボタンと扉が閉まる。全てが業務的。全てに無駄がない。

俺はシーツを洗濯機に突っ込んでシャワーを浴びる。今日も眠れないだろう。だけど明日は休みだし、今の俺にラブノウは必要ない。いや、やっぱり必要だ。

寂しいからラブノウに話し相手になってもらおう。

俺は三兄弟の末っ子で、上の兄貴は二人とも日本人なら誰でも知ってる有名大学の医学部を出て現在ではでっかい病院の医者をやってる。

兄貴二人は俺を蔑む。親父に至っては呪いさえする。真壁家の恥——まさか血族からフリーターが生まれるとは思ってなかったらしい。親父はその世界じゃむちゃくちゃ有名な凄腕の執刀医で、恐らくその血を引いてるからこそ俺は美智子の手首を上手く切れたりする。

俺は昔から何かを切るのが好きだった。どうして好きだったのかはわからない。親父の血を引いてるというのは、それに繋がる理由にはならない。

工作の授業でダンボールを切り刻み、夏休みになれば蜘蛛や蝉を切り刻んだ。自分で言うのもなんだけど、俺は別にクレイジーじゃない。ガキのお遊びに過ぎなかった。面白半分に蟻を踏み潰すガキは現代にだってたくさんいる。

もちろん、俺の《切りたい欲求》はせいぜい昆虫までにしか発展しなかった。人間は当然として、犬猫を切り刻んだ事もない。つまり俺は真壁三兄弟の中で、ひいては真壁ファミリーの中で、一番まともな男の子というわけだ。

兄貴二人にも、俺と同じように《切りたい欲求》が存在していた。ただ、あの二人が切りたかったのは俺のように形のあるものじゃなくて、もっと不確かで曖昧なものだ。それは切るといふより隔絶と

か、あるいは断絶と言った方がいいかもしれない。

つまり兄貴二人は人間じゃない。悪魔だった。

長男の慶太郎は俺の三つ上。次男の早太郎は俺の二つ上。奴らの間には双子じみた絆があった。あいつらはテレパシーでも使えるんじゃないのといわんばかりの以心伝心で絶妙なコンピプレイを得意とし、悪行三昧を繰り返してきた。

何よりもいけなかったのは、俺の家が金持ちであったということ。そして、兄貴二人がガキながらに金の使い方を知っていたということだ。悪魔に金を持たせるとろくなことが起きない。でも、困ったことに、世の中悪魔の方がたくさん金を持っているのだ。

兄貴達がしたことをまとめてみる。

小学校六年生の時、長男慶太郎は地元の不良中学生数名を金で雇い、なにをとち狂ったかとある団地の一部屋に住む二十代のヤンママを犯させ、さらって、また犯させた。

中学一年の頃、次男早太郎は三年生の先輩数名を金で雇い、同級生の女子を片っ端からさらって、なにをとち狂ったか自ら処女を奪いまくって写真に取りまくって脅しまくった。

さて、当然の疑問が生まれてくる。

まず、なんだって不良中学生は兄貴達に雇われたのか。つまり不良らしく兄貴達を脅して金だけ奪って、かもったりしなかったのか

という事だ。

みそは不良中学生《数名》という部分にある。兄貴達は金の使い方を熟知していた。多分、生まれる前くらいから。

この数名が、仮に三名であつたとしても。実際はもっといた。あくまで分かり易くする為にコンパクトにする。

まず、不良Aに兄貴がこっそり言う。慶太郎でも早太郎でも想像するのはどちらでもオツケイ。奴らは思考回路を共有してるんだ。

『実はAさんに頼みたい事があるんです』

『あん？』

『かくかくしかじか』

『あ？ てめえそんな金持ってるのか』

『はい』

兄貴は諭吉を数枚ひけらかす。

『へえ。マジかよ。でもよ、てめえ馬鹿だぜ。俺がおめえぶっ飛ばして金だけ奪うって考えなかった？』

兄貴は笑う。

『いや、実はBさんCさんにも同じ事言われまして、何とか逃げてきたんですよ。そこで相談なんですが、Aさん、僕のボディーガ

ードになつてくれませんか』

『はあ?』

『Aさんがこの界限じゃ一番顔が利くし強いって聞きました。BさんとCさんから守って欲しいんです。僕の頼みを聞いてくれたら、この十倍くらいのお金をAさんにお支払いします。あ、でもAさんほどの方が僕みたいな小僧のボディーガードじゃ格好つかない……ですよね』

もちろん、兄貴はBとCにも同じ事を言う。

『別に、あいつら抑えるくらい、黙ってたってできるけどよ』

まあとにかくこんな感じでAとCは牽制しあつて結局最終的に協力しあう。金があれば何でも解決できるのだ。イツトウル。けど、そんな事は大人になつてから知ればいい。兄貴達は気付くのが早すぎたのだ。もし真壁家の財政が標準的な家庭と同程度であつたら、二人が悪魔になる事も、あるいは無かつたかもしれない。

でも、誰にそんな事が解るっていうんだ。

兄貴達が高校に上がる頃には、二人共すっかり真壁帝国を築き上げていた。名のある不良にはくつついてくる連中がたくさんいる。頭さえ抑えれば、お支払いは最低限で済む。

ある時、早太郎が言った。

『なあ慶太郎。俺達ってさ、どっちの方が優れてるんだろうな』

『さあな。なんだったら試してみるか？』

俺はマイルームの扉の隙間から、その会話を盗み聞き、盗み見ていた。二人ともおんなじ表情をしてる。顔は笑ってるのに目が笑ってない。当時中学生だった俺は、そんな顔の出来る人間を知らなかった。

『おい、尚太郎。お前はと思う』

慶太郎が廊下から俺に視線を送っていた。俺は何をするにも、兄貴達の目を誤魔化す事が出来なかった。

早太郎が扉を開ける。ニタニタ笑ってる。肩を抱かれて、引っ張り出される。

『あはは。慶太郎、そんな事こいつに聞いたら可哀想だよ』

『だけど、一番俺達に近いところにいるじゃないか、尚太郎は』

俺は目を瞑る。目を閉じてても兄貴達の顔が暗闇に浮かび上がる。

俺はカッターで二人の顔を引き裂いた。二人の顔は闇に消え、またまた浮かび上がってくる。

『俺達に近いつて、勘弁しろよ。こいつは平成の切り裂きジャックだ。切り裂く事しか脳のない変態だぜ。親父みたいに』

俺の部屋に早太郎が目やる。机や椅子、壁、全ての家具に俺のつけた切り傷がミミズみたいにつねっている。

『いいさ。聞いてみよう。俺は結構尚太郎の事が気に入ってるんだ』

『慶太郎がそう言うなら、別にいいぜ。なあ、お前はと思う？』

肩に痛みが走る。早太郎が肩を握り締めている。俺は目を開く。そして赤ん坊よろしく泣きじゃくる。

『あーあ、泣いちゃった』

『なんだ。そんな事にも答えられなかったのか？ いいよ。もう行け尚太郎。見損なった』

俺は部屋に引きこもる。体育座りでシクシク泣く。兄貴達の笑い声が聞こえた。俺はなんだかいたたまれない気持ちになって、カッターで腕を刺してみた。カッターは突き刺さらないで途中で折れる。貫くのは俺の分野じゃなかった。

兄貴達は結局、自分達で競う事にしたらしい。お互いが雇った不良軍団を戦わせたのだ。真夜中の河川敷で総勢百に届きそうなツツパリのバトルが行われた。いやはや、俺は遠くからそれを眺めていたが、圧巻の光景だった。兄貴達はお互い、この決闘に買った五百万の報酬を出すと双方のボスに約束する。ボスは金が欲しい。下端はボスが怖い。みんながみんな必死でした。

ビシ、バシ、なんて音は聞こえない。バタバタだけだ。基本的に鉄パイプなり石なりを武器に使ってるからどんどんぶつ倒れる。俺はこのままじゃ誰かが死ぬと思ってびびって警察を呼ぶ。

兄貴達の勝負は引き分けに終わった。不良達はみんな仲良くしょ

つぴかれる。兄貴達の存在がバレる事はなかった。兄貴達の事を知ってるのはボスだけだ。ボスにはすでに、万が一の場合の為の口止め料が三十万円支払われていた。

俺は高校を卒業すると家を出た。兄貴達と暮らすのは冗談じゃなかった。兄貴達はなんであんなにも意味のない暴虐を続けるのだろうか。俺は怖くて兄貴達に聞けない。俺は兄貴達に馬鹿にされてる。兄貴達は俺の事なんか虫けらくらいにしか思っていない。俺は潰される。何故なら俺の原初の記憶で、兄貴達はこんな事を言っていたのだ。

『パパはなんで三人目をつくったんだろう。慶ちゃん』

『わかんないよ。でも、僕達三人もいらないよね』

『うん。本当は一人だって完璧なのにね』

兄貴達は悪魔だった。奴らは文字通り、血を分けて生きている。俺は奴らの弟である事がいまだに信じられなかった。いつか、真壁の血統を切り裂いてやる。てかこの物語に兄貴達は関係ない。俺はどうしちまったんだろう。

美智子に会いたい。美智子に会いたい。

だけど、頭の中に美智子を思い浮かべると、何故かいつのまにかラブノウに変わってしまう。

んで携帯が鳴る。んで慶太郎からの着信。んでぶつちする。んで

メール来る。

「父危篤」

三文字のメッセージ。俺は五文字で送り返す。

ざまあみる

電源を切って部屋を出る。行き場所なんてありはしない。強いて言えばラブノウ。俺にはラブノウしか友達がない。恋人はいない。美智子はどこで、何をしてるんだろう。

もしかしたら、ラブノウは親友かもしれない。真夜中に押し掛けて魔法をかけてもらったのはついこないだなのに、今日もラブノウは嫌々な顔をしながらも、しっかり俺の相手をしてくれる。

「まったく、君には礼節というものが根本的に欠如しているよ」

俺はラブノウと一緒にマンションから歩いてすぐのちよこつと洒落たバーのカウンターでビールを飲んでいる。

天井は鉄パイプみたいな梁が剥き出しで、そこに青色の蛍光灯が吊り下がってラブノウの青白い肌をさらに真っ青に染色した。キモすぎるぜ、ラブノウ。

「いや、俺はいい友人をもったよラブノウ先生」

「僕は二十も年の離れた若造を友人と認められるほど先進的な人間じゃないんだ」

バーには閑古鳥が鳴いている。でも実際に鳴いてるのは鳥じゃなくてスピーカーだ。ハードロックだ。俺とラブノウには不釣り合いだが、なにせ閑古鳥が鳴いているから他に釣り合いそうな人間を見つける事も出来ない。

俺はビールをぐいっと飲み干してチヨリソをかじる。ラブノウはちよびちよびジョッキに口をつけていた。

「それで、今日は何の用だい真壁君。僕もそんなに多忙じゃない

が、真夜中に若造と酒に興じられるほど暇でもないのね。さつさと言いたまえよ」

そう言つてラブノウは煙草を口にくわえた。俺は露骨に嫌な顔をするがラブノウは断固無視の姿勢をとる。まあ仕方ない。今日は許す。これ以上機嫌を損ねるとラブノウもさすがにキレてしまつたろうから。

「実はねラブノウ。俺には彼女がいるんだけど、どうも彼女じゃなかったらしいんだ」

ラブノウは煙草に火を点ける。

「君は物事を順序だてて説明するのがどうも苦手らしいね。はっきり言つて意味がわからない」

俺はラブノウに物事を順序だてて説明した。

俺が美智子と出会つたのはラブノウが女子高生をレイプしようとして俺に見つかつてへこんでから三日後。俺はバイトを終えて渋谷をうるちよろして道玄坂らへんの風俗街に迷い込む。俺は普段はそんなに性欲の強い人間じゃないしそもそも時間帯も昼間だから明らかに風俗に行くような条件は揃つてなかったんだがしかし風俗のボーイの一人に声をかけられる。

『お兄さん三千円でぬけるよ』

三千円！俺はいくら昼間だからってそれは安すぎるし明らかにぼったくりだろつて思つて無視を決め込む。でもボーイは食い下が

る。

『手だけなんだよお兄さん。うちは手だけのぬきになるから安い』

俺はそれで納得する。風俗のバリエーションも随分豊富になったと思う。手だけならまあ三千円もうなずけるプライス。

特にする事もなかったから俺は三千円でぬきにいく。

店の中は薄暗くってトランスが流れててピンサロっぽかった。待合室のソファーには先客が三人ほど座ってる。俺は空いているスペースに腰を下ろしてテーブルに置いてあった漫画雑誌を手にとって読む。でも薄暗くてよく見えない。世界は矛盾に満ちていた。

俺に順番が回ってきて俺は二階に案内される。赤いソファーが廊下の左右に並んでる。一応カーテンで仕切られているがおざなりだった。俺は手前のソファーに案内される。

そして美智子がやってきた。

美智子は紺の टीーシャツ にジーンズ 姿でおおよそこの店の店には似つかわしくない格好をしていた。こんにちは以外に何も喋らず美智子は俺の股間をまさぐり俺のボーイはスタンダップ。俺のボーイもこんにちは以外何も喋らない。

美智子は俺のボーイをこんにちはさせて直に握って亀頭を指先でくすぐる。美智子は俺を見ない。俺は美智子の手首を見る。ギザギザだった。ギザギザのかさぶたが美智子の手首をギザギザにしていた。

俺のボーイは萎える。美智子はそこで初めて怪訝そうに俺の目を見つめる。

『どうしたの？』

俺は言葉を失う。俺はどうしたんだろう。どうしたんだろう。店内には摩訶不思議アドベンチャーのトランスバージョンが流れていた。

『……る』

『え？』

俺の言葉は摩訶不思議アドベンチャーに遮られる。もう一度言う。

『俺ならもっと上手く切れる』

俺は言ってから自分の口を右手で塞ぐ。何を言ってるんだこのバカ。愚者すぎる。本来俺はワイズマンだ。こういつくだらない事をいう種類の人間じゃない。

『手首の事を言ってるの？』

美智子は俺のボーイをさすりながら尋ねる。俺は目を逸らす。視線が空中を漂う。行き場所がない。俺には視線すら行き場所がなかった。だけど美智子は俺の視線に行き場所を与えてくれる。美智子の腕が俺の目の前に伸びてきた。

『あなたなら上手く切れるのね』

手首が俺に言う。俺は勿論さベイベーと答える。手首になら俺は素直になれる。どうしてだかわからけど、きつと手首も素直だからなんだと思う。人間にそれぞれ生き方があるように、手首にだって切られ方があるんだ。そして、手首だって切られ方を選びたいんだろ。

『俺は天才だよ。何かを切るということに関しては間違いなく』

『任せたわ』

俺は美智子の腕を掴んで手首と手首についてるギザギザをじっくり見つめる。

『何するのよ』

『君の手首に頼まれたんだ』

『上手く切って欲しいって?』

俺はびっくりして美智子の手首を離す。あまりにびっくりしたせいかボーイがガマン汁をちょっと噴射した。

『なんで解る?』

『だって、私の手首だもの』

俺は頭を掻く。その通りだ。

『で、あなたは私の手首を上手に切ってくれるのかしら』

『君と君の手首が望むなら』

『嘘言わないで』

刺すような視線。美智子は俺のボーイを少々キツく握り締める。顔をしかめる。しかめざるをえないペイン。

『あなたが切りたいただけでしょう？』

どうして解るー言葉が出ない。再び勃起した。俺は包み込まれる。美智子は全能なのだと思った。いや、全能のはずはない。全能ならば手首はあんなにギザギザにならない。だけどそれでも美智子は全能なのだと思った。

『切らせてくださいでしょう』

『切らせてください』

俺は美智子にメールアドレスを教えた。

ラブノウが二杯目のビールを頼むと、バーに二人組の若いカップルが入ってきた。俺達の隣に座って、まるで俺達なんて空気と大差ないぜって感じで寄り添いあっていちゃいちゃしだした。

「僕が思うに」

ラブノウは言う。

「そもそも何で君がその美智子という女性を彼女だと思っていたのが疑問だね」

「だからさ、美智子は俺にとって神様みたいなものなんですよドクターラブノウ。ある種の主従関係が結ばれているんです。その結ばれている性というやつを現代風に言い換えるとやっぱり彼氏彼女になるのかなと思ったんだけど違う？」

ラブノウは溜め息をついて俺に憐れみの視線を送る。

「違うね」

ラブノウは席を立ち、隣のカップルの背後に移動する。

「例えば」

ラブノウは若い兄ちゃんの肩を叩く。兄ちゃんは振り返らないでいちゃいちゃしてる。

次いで姉ちゃんの肩を叩く。姉ちゃんは振り返らないでいちゃいちゃしてる。

「見たかい？　このように結ばれているというのは、それがどんなに低レベルでもお互いに他者を寄せ付けない絶対不可侵な領域ーあるいは世界ーを構築する事を言うんだ。この二人にとって外部の人間は空気に等しい。エデンのアダムとイブよろしく、果実さえ食さなければ永遠に楽園の内で強固な絆を保てる。しかしー」

ラブノウは俺に指を差し、立て、振る。

「君と美智子さんの場合は違う。絆というのは《何も知らない》からこそ強固なんだ。美智子さんが君にとって全能であるというならば、根本的なところから君の言うところの《結ばれている性》は発生しない」

俺は肩を落とす。俺と美智子は《結ばれていない》。頭の中で響く響く。

「証拠を見せよう」

ラブノウはカウンターの内側に入り、カップルに向けて両の人差し指を立てて振る。すると兄ちゃんと言う。

「ああ、俺そつういえば昨日浮気したなあ。セックスしちゃったなあ。お前以外の女としちゃったなあ」

姉ちゃんが言う。

「うそ、でも私もしちゃったなあ。あんたの友達のよし君に誘われてついついしちゃったなあ。あんたの事は大好きだけどよし君の方がエッチはうまかったなあ」

カップルはお互いに顔を見合わせる。

「別れよっか」

重い足取りでカップルは店を後にする。

「果実はいらぬ。知れば知るだけ絆は壊れる」

「なるほどね」

やっぱりラブノウは凄い男だ。何でも知ってる。多分、人を愛するということ以外は。あと、素人とするセックス以外は。

「ところで、マスターの姿が見えないね」

何を言ってるんだいラブノウ。もはやあなたはマスターさ。全知全能さ。まるで美智子さ。

ラブノウはカウンターに両手をついて俺の顔を覗き込む。眠そうだねー眠いんだ。

「僕は君の事が嫌いだが、君という人間の本性はそこまで嫌いじゃない。だからこうして付き合ってる」

「俺に弱みを握られているからじゃなくって」

ラブノウは困ったように笑う。

「それもある。だけどそれだけじゃない」

俺はラブノウにビールを頼む。俺の口の中がビールで満たされる。

カウンターが歪み、音が消えた。解ってる。俺は安心してゐるんだ。

「眠るといい。君の悩みはそれでいくらかは解決される」

今日に限ってどうしてこんなに優しいんだいラブノウ？ ああそうか。これは夢だ。夢に決まってる。よく見たらここはバーじゃない

い。ここには何もない。ただの闇だ。なにかもがまやかして幻だ。
いいやーラブノウの音がする。

僕はまやかしなんかじゃない。

意識が飛んだ。

分厚いステーキが二枚俺達のテーブルに運ばれてくる。両方ともレア。俺と美智子は生物が好きなのだ。

どういうわけだか、夕食と一緒に食べようとさっき美智子から電話があつて当然ながら俺はそれに食いついて、親父や兄貴達が行きそうな高級レストランのテーブルの一角に俺達は対面に座ってる。

百平米くらいの間取りで、四隅には観葉植物が置かれている。ウェイターの仕草は何かもが義務的だった。規則正しいお辞儀。規則正しいスマイル。全てに無駄がない。だけどそんなもの俺には全て無駄だった。俺の視界には美智子しかない。

俺は食前酒のつもりでワインを嗜む。

ワインの味なんかわかりはしない。

それでも、何かアルコールが必要だった。わざわざ美智子が俺を食事に誘うという事は、善かれ悪しかれ確実に何らかしらの意味がある。そしてその意味を解した時、俺は間違いなく衝撃をうける。恐らくシラフでは耐えられない程のクラッシュ。はったりでもいい。美智子の前ではどんと構えていたかった。

「よく、そんな不味そうなものが飲めるわね」

俺は口の中を舌でくちやくちやした。苦い。確かに不味い。よく俺はこんな不味いものが飲める。

「雰囲気だよ。俺はワインじゃなくて雰囲気を飲んでるんだ」

「嘘よ。真壁は雰囲気飲まれてるわ」

パーフェクト。美智子にはったりは通用しない。さすがに唯一かつ絶対な神様。もはやヤハウエ。

「食べましょう」

美智子はナイフとフォークを手取る。ステーキが裂かれていく。血のように赤い肉汁が滴る。

「待つてよ美智子。君は一体、何のために俺を呼んだのさ」

「食事をするためよ」

「嘘だね。美智子がわざわざそんな事の為に俺を呼ぶなんてありえない。宇宙が実はただのプラネタリウムだったっていう冗談なみにありえない」

美智子の唇がつり上がる。俺は唇をきゅつと結ぶ。

「知らなかったの？ 宇宙は実はただのプラネタリウムだったのよ」

溜め息が出る。俺は右肘をテーブルについて掌に顎を置いた。

「だから冗談を言い合っても意味がないんだって」

「冗談？」

心底驚いたように美智子は眼を見開く。

「あなた宇宙の何を知ってるのよ？」

俺は俺が宇宙の何を知っているか考えるがそれは路傍に転がる石の何を知っているか考えるのと大差ない気がするやめた。俺はそもそも何も知らない。だから知りたい事がたくさんある。問題は誰もそれを教えてくれない事だ。

「宇宙はただのプラネタリウムよ。間違いないわ」

グサツと美智子のステーキのひとかけらにフォークが刺さる。美智子の手首は再生していた。切られたがっている。切られたくてもずうずうしている。

「問題は宇宙がプラネタリウムである事よりも」

ステーキは美智子の口の中にパクツと入って美智子の血となり肉となる。

「宇宙がプラネタリウムであつたところでなんら問題ない私達の生き方よ」

美智子はステーキを噛み締める。店内にはクラシックが流れ始めていた。

「だから、私が何者であつてもなんら世界には問題ないのよ。それがそもそも大問題だつていうのにな」

神の言葉だった。俺はいつかどこかで読んだヨハネだか誰かの福音書の最初の一節を思い出す。

初めに言葉があつた。言葉は神であつたー。

「ねえ真壁、私の事愛してるの？」

俺は頷く。美智子は悲しそうに笑う。

「嘘つき」

「本当さ」

「あなたが私の事を愛しているなら、私があなたの事を愛せないわけないもの」

俺は眼がトロンとしてくる。俺の周りの空間が歪み始めてくる。俺は眠りたくなる。四隅の観葉植物とクラシックのコラボレーションが素晴らしいリラクゼーション効果を俺に与える。だがしかと俺は思う。

《俺は眠るわけにはいかない》。

俺は眼に顔中から引つ張ってきた力を込める。目の前に置かれたステーキに対して食欲を促す。大丈夫。俺は眠らない。眠いけど眠らない。

「眠いのね」

「眠いよ」

「今寝たら、私達二度と会えないわ」

正解だった。やはり俺は《眠るわけにはいかない》。

ヘイウエイター。俺にバリバリに効くウイスキーでもテキーラでもとにかくありとあらゆるアルコール度数の高いアルコールをプリーズ。俺は手を上げる。

「逃げないでよ真壁。思考を分散させては駄目」

美智子は手首を俺に掲げる。俺は見上げながら、あくまで下から美智子の手首を掴む。

美智子の手首には傷がついていない。完全にクリーンだった。どうしたんだ美智子リスト。お前は本当に美智子リストか？

「切りたいの」

美智子と言う。

「あるいは切りたいの」

俺は今の今まで、そして今がなければ恐らく永久に口にしなかったであろう質問をついついっかかり口にする。

「何故？」

美智子は俺の手を払う。俺のステーキを指差した。

「食べないの？」

「食べるよ」

俺はフォークとナイフで肉を切る――おいおいまさかまさか美智子、やめてくれよー！。

「何で切るの？」

心臓が早鐘をマシンガンよろしく撃ちまくる。そんなバカな、俺はこの問いに答えたくない。つまるところこの回答が結局俺の美智子に対する質問の回答に繋がってしまうというのはあまりにイージ―に予測がつく。

それはまずい。駄目だ。美智子にそれを言われるのは困る。俺の中で美智子が美智子たらしとする為にもそんな事は避けるべきだ。

でも、だけど……。

美智子は両肘をついて両手を重ねて顎を置いて俺を見つめる。視線が言う。あるいは手首が言う。

その先を言えー！。

俺は美智子の奴隷だった。

「食べやすいからだよ」

空間に亀裂が走る。ウェイターの顔にヒビが入る。

「同じよ」

美智子の顔がバラバラになる。

「生きやすいから切ってるの」

なんてことだ、マザファツカ！ 俺の予測は完全に当たった。俺は美智子の口からだけではそういう言葉を聞きたくなかった。そういう意味がありそうでその実なんの意味もないような薄っぺらくておざなりでそこら辺にいくらでも転がってそんな言葉を美智子の口からだけは聞きたくなかった。

何で手首を切ってるんだいー。

誰かの声が聞こえた。ラブノウか、あるいは慶太郎か、もしくは早太郎か。

生きやすいから切ってるんだー。

俺の声が聞こえた。

そつだよ美智子、そんな言葉は俺にだって吐けるんだ。美智子はそんな言葉を吐いちゃならない。訂正してくれ。無かったことにしておいてくれ。全てを零に戻してくれ。

「無理よ」

美智子は立ち上がる。美智子の顔はヒビ割れ過ぎて美智子の顔に見えない。

「あなたは知ろうとしてしまったもの」

テーブルが消える。すなわち境界が消えた。空間に入った亀裂が広がって俺と美智子以外の全てを飲み込んでいく。

「ねえ真壁。私の何がそんなに憎いの？」

破裂しそうに美智子の顔はボコボコいつてる。美智子は闇と共にあった。美智子は両手首を返して俺に見せつける。

美智子の手首に赤い線がじゃんじゃん入る。美智子の顔は破裂寸前だった。美智子はもはや神じゃなかった。美智子ボンバー。

俺は美智子が憎くない。美智子が憎いなんてとんでもない。俺は美智子を愛してる。愛してやまない。オンリーワンでかつナンバーワンに愛してやまない。

「私はあなたのお兄さんじゃないわ」

俺は早太郎でも慶太郎でもない。俺はあいつらが憎い。あいつらを生んだ親父が憎い。俺を生んだ親父が憎い。奴らの血統に連なる俺が憎い。

「あなたはお兄さん達に劣っていたわけじゃない」

嘘だ。あいつらは悪魔だけど悪魔的に優れてもいた。俺には《切る》しかなかったんだ。

「優しすぎただけよ」

美智子が遠ざかっていく。美智子は爆発する。美智子ビックバン。このようにして宇宙が生まれた。

「今日はお別れを言いに来たの」

初めに言葉があつたー！。

「だけど、永遠の別れじゃないわ」

言葉は神であつた。

暗い部屋の中で俺は目覚める。というか俺の部屋で俺は目覚めた。俺の部屋は暗いけど真っ暗じゃない。新宿の高層ビル群の光は見事に我が家の窓まで届いてくれる。

大規模な停電でもおこればいいのと思う。俺は今、いや、いつでも暗闇を求めている。でもやっぱり特に今暗闇が欲しかった。どこまでも真っ暗な闇。視界も零。音も零。パーフェクトダークネス。よこせ誰か。

俺は携帯の短縮ダイヤルで美智子の名を呼び出す。通話ボタンをポチ。この電話番号は現在使われておりません。

見つけた。パーフェクトダークネス。

俺は街に繰り出す。

新宿に行く。

都庁とか歌舞伎町とか光ってるもの全部ぶっ壊す勢いで行く。そういう気分になる。そういう気分にならざるをえない。だけど俺にそんな力はない。痛感する。俺は俺の無力を痛感する。大切な者を繋ぎとめておけなかった俺の無力を思い知らされる。然り、俺はくたくたになってコマ劇前広場の真ん中で大の字で寝そべる。

星が見えました。やっぱり宇宙はプラネタリウムだった。東京でこんなに綺麗な星空が見れてたまるかマザファツカ。

俺は泣いた。何だか、体がだるかった。

「真壁さんじゃない」

ダンディーな声が聞こえて目を開けるとダンディーな主婦の佐藤さんがバリバリな化粧を決めて、でも髭面なフェイスで俺を覗き込んでるからびっくりして俺は起きる。

「こんな所で寝てると風邪引くわよ」

佐藤さんは水商売風のコートでそのがっしりした肩幅を締め付けつつ、下はホットパンツに黒のブーツという格好でさも心配そうに俺を見つめる。

「それに、何だか顔色も悪いみたいだし」

両頬を両手で触れられて額に額をくつつけられて失神寸前で湿疹寸前の俺はまた泣く。シクシクエンエン。

「熱もあるわ。うちで休んできなさい」

俺は佐藤さんに引つ張られてコマ劇から二丁目の方へ連れてかれる。んでゲイバーデビューを果たす。

女の子の控え室というかダンディーな女の子達の控え室に俺はいる。赤いソファにうなだれた。目の前に八つのロッカーが並んで。隣に佐藤さんが座ってる。

「今、冷やせるもの持ってくるわね」

一人にしないで佐藤さん。いや、佐藤さんにいて欲しいわけじゃなくて灯りを消して欲しいの僕。他の生物とか無生物が見えちゃう

と一人な事を実感しちゃうから無理なの。真っ暗にしゝて、ほしーの！

ボタン。声なんか出ないし、動く力も残ってないっす。

美智子のバカバカ。お前は俺とお前の手首をほってどこにいきやがったんだびっちびちのビッチめ。うえあーあーミチコ。帰ってきてくれお願い。

いくら待っても佐藤さんは戻ってこない。扉の向こうから陽気なラテンミュージックが聞こえてくる。きっとショータムだ。俺は見捨てられていた。美智子にも佐藤さんにも真っ暗闇にも見捨てられて俺はこれからどうすればいい？

いやいや、すべきことはまったく一つ。美智子捜し。美智子を訪ねて三千年。決まってる。決まりきっている。それこそ真理。それこそーそれに意味なんてないわ。

そうだよ真壁君。そんな事に意味なんてない。君は嫌いなんだろ？　そういう意味がありそうでその実なんの意味もないありとあらゆる事柄が。

そうだよラブノウ。俺は嫌いなんだ。一切合切そのての無意味アドベンチャーはお断りだね。でもね、美智子は別なんだ。美智子が神であるうとなかうと俺はやっぱり美智子無しじゃ無理なんだ。だから捜す。尋ね人美智子。いかなる手段をもっても捜す。

何故捜すの？

君の事を愛してるから。

それがそもそも間違っているんだけどな、真壁君。

うるせえラブノウだか偽美智子！ 俺を惑わすな！ 美智子は自信ないけど少なくとも美智子リストは俺を待ってる！ ねえラブノウ、あんたは一体なんなのさ。俺に優しくったり意地悪かったりどっちなんだよ何がしたいんだ。

俺は誰に向かって喋ってるんだろう。一言喋るたびに一言ずつ記憶が失われていく。誕生と消滅。このようにして歴史が生まれた。

俺は頭を抱えて立ち上がるうとするがフラフラで立ち上がれない。匂う。血の匂いがする。美智子リストの血の匂いがプンプン漂う。

俺は絞る。なんでこんなに体がダルいか知らないけれどとにかくありったけの力を絞って立ち上がるうとする。だって君は近くにいます。俺を待ってるはずなんだーいいえ、待ってないわ。

私を捜す事なんて無意味よ真壁。

美智子さんの言うとおりだよ真壁君。

体から力が抜けていく。針を刺された風船みたいなバルーン真壁な俺はしかしギリギリのところで栓をする。

やれやれ。真壁君、君はもう少し自分の体調について知った方がいいね。

「俺は捜す。んで見つける」

頬をパチパチ叩いた。乾いた音はラテンと融合して俺はのりになる。ビバ・ラ・ラッサ！ いざゆかん美智子捜しの旅へ。

仕方ない。ほんの少しだけ助け舟を出してやろう。ただし真壁君。

《僕が君に力を貸すのはこれで最後だ》

「ビバ・ラ・ラッサ！」

魔法の呪文！ 意味はなんだか忘れたけどたった今この瞬間においてこれは開けゴマと同じ意味合いのキーワードだ。

扉が開いた。左から二番目のロッカー。すんげー闇。待ってました闇。明らかに闇みたいなのがロッカーの中でうねってドロドロして溢れて部屋中を包み込もうとしている。

佐藤さんにお礼を言うのは後回しにしよう。レッツゴー真壁。美智子は闇と供にあるのだ。

それで、私と会って真壁はどうしたいの？

「切りたいんだ」

口が勝手に動く。

「あるいは、切られたいんだ」

何を言っただ俺。まあいいや。視界がグルグルしてきたから口ッカーから旅に出よう。

ジャンプ。

ギョオオオーン。おおおすげー。左右に見える景色がバンバン後ろに飛んでくつつーか俺が前に進んでんのかしら？ うおおー。山手線にぶつかりそうになった。ビルとビルの間をすり抜けた！ あれ？ ここ渋谷じゃねえ？ ハチ公発見。近付いてくる近付いてくる近付いて……ガチン。ボタン

ハチ公から道玄坂の方へ歩く。さっきまでの体のたるさは綺麗さっぱり消え去って俺は今にも走りたい気分では仕方ない。だけど行く場所は決まってるし走っても仕方ないから走らない。

今の俺は恐らく生身じゃない。生身であるはずがない。生身なら新宿から渋谷までワープできるはずがない。その証拠に俺は透ける。透けまくってる。すけすけのシースルー。エロチック。これが幽体離脱であるとしたらオカルトはみなすべからくエロチック。

道玄坂の緩い坂を登る。肩で歩く金髪の坊主にぶつかってみる。透けた。透けたけど睨まれる。睨まれて胸ぐらを掴まれた。

「おい」

「おう」

「何ぶつかってんだてめえ」

「ごめんよわざとじゃアルマーニ」

「喧嘩か？俺は喧嘩を売られてるのか？」

「違うぜ兄ちゃん。これが未知との遭遇だ」

「あー？」

金髪坊主はチッチッチ言いながら顔を振りまくって眉毛を八

の字にしまくって俺を威嚇しまくった。

「死にたいのか？ お前は死にたいんだな？」

……！

おつとつとなんだこのガツンな感じは！ 俺の中でバラバラだったパズルのピースの大きなひとかけらががちつとどこかにはまった感じがする。いや待て、だとすると俺は死にたいという事になるがその辺はどうだ自分。俺は死にたいのか？ 死にたくて仕方ないのか？

「何とか言えおい」

「美智子に会えないなら死にたい」

「は？」

「美智子に会えるなら死にたくない」

「は？」

「イコール」

「はは？」

「俺の生き死にはあと数分後の答えにかかってるっばい」

「ばいならイコールじゃねえだろうが！」

殴られた。透けてるのに。どこまでいっても俺の人生は矛盾と痛みに満ちている。

というわけで俺は美智子が働いてる手コキ風俗に足を運ぶ。がしかし見つからない。だから探す。ラブホとラブホの間をぐぐり抜け、風俗の看板をとにかく探す。

ない。どこにもない。俺は無料案内所に入る。光りまくってる。キャバクラやヘルスのディスプレイが狭い部屋の中で光りまくってる。

「今日はキャバすか？ 抜きですか？」

ロン毛でがんぐろでデブなおっさんが透けてる俺に話しかけてくる。

「抜きです。しかも手コキで抜きです」

「手コキ？ うちじゃ扱ってないねえ。店の名前はわかる？」

あれ？ そういえば店の名前がわからない。美智子はなんて名前の店で働いてたっけ？

「ちょっとわかりません。でもあるはずですよ」

「うーん、ここ界隈に手コキの店なんか聞いた事ないなあ。セクキャバくらいなもんだよ、近い店は」

セクキャバってのはつまりピンサロだ。お口くちゅくちゅだ。で

も確が高い。何故が無駄にセクキャバって名前だけで高い。

「手コキじゃなきゃ駄目なん？」

「手コキじゃなきゃ駄目です」

美智子リストは手首であって口じゃない。当たり前だが、手コキで然るべきなんだ。俺は美智子リストにイカされる事によって答えを見いださなければならぬ。

何の答えを？

「まあいいや。ちょっと待ってて」

おっさんは奥の小部屋で誰かと電話し始める。電話を切ると俺の元へ帰ってくる。

「つまりさ、マネー的な問題でしょ？」

「マネー？」

「だから予算よ。安く済ませたいんでしょ？」

美智子は安くない。然るべく易くもない。

「今さ、激安セクキャバと連絡取ったから。安い割にテクのある子いっぱいいるよ。ルックスは保証しないけど」

ガハハハハ。俺は肩を叩かれる。透けるから叩かれない。ガハハハハ。お兄さん幽霊だったの？ ガハハハハ。

おっさんは易かった。ベリーイージー。世界がこのおっさんの思考回路で回る事を切望してやまない。

俺は様々な思案を巡らせながら同時に鼻を利かせる。美智子リストの血の匂い。今や道玄坂界限にはそればっかで溢れてる。切りたい欲求も比例して溢れる。美智子はどこにいる？ 切りたくて仕方ない。美智子の手首を切りたくて仕方ない。仕方ない事ばかり。仕方ない事だらけ。

古ぼけた集合ビルを地下一階に降りる。おっさんに紹介されたピンスカロの扉はすぐに見つかった。だって扉に安っぽい紙が貼ってある。手書きでこう書かれてる。

【金でイケない事がある。イケる場所は激安セクキャバ】

イージー。しかしハードかつタフ。見ようによっちゃウルトラクール。

扉を開けと誰かが言う。真実が近付いている気がする。真実の扉は激安セクキャバ。美智子との関連は風俗のみ。

何かが間違ってる。間違ってるよとラブノウが言う。

《真実は言葉では言い表せない》

「なるほど。やっぱりラブノウは神だ。神か馬鹿のどっちかな」

俺は周囲に目を配る。灰色の廊下が左右どこまでも延びている。

おかしい。だって俺はエレベーターを降りたばかりだ。つまりよ
うするに。

廊下がどこまでも延びているわけがない。線路じゃないんだから。

「なあ。俺はいつからぶつとんでる？」

俺は聞いた。美智子に聞いた。ラブノウに聞いた。慶太郎に聞い
た。早太郎に聞いた。

『いつもぶつとんでる』

ほらみる。俺に答えを教えてください。奴はいない。いつも斜めに濁
される。

俺は扉を開ける。ボーイが満面の笑みで頭を下げる。いらっしや
いませ真実へようこそ。

やれやれ。俺は答える。

「真実は言葉じゃ言い表せないんだぜ？」

ボーイは答えない。右手を一番手前の真っ赤なソファに掲げる。
俺は肩をすくめる。

「三千円になります」

関連性二。美智子の店とセンプライス。俺は三千円払う。ソフ
アーに座って美智子を待つ。

ところが美智子は来ない。隣に座ってるのは美智子どころか五十に届きそうなばあ。じじいの次に嫌いなばあ。むしろ宝くじ屋にいたあのばあだ。

「あんだどつかであつたね」

「死ねばばあ」

ばあが胸元のはだけた赤いドレスを着てやがる。セイアゲイン。

「死ねばばあ」

「あんだ、私のテクを味合わない後悔するよ」

後悔はとつくにしている。真実は言葉で言い表せない。でも間違はなく俺の言葉は真実だ。

「死ねばばあ」

ラブノウの嘘つき。

「ちよつとだまりな」

店内に摩訶不思議アドベンチャーのトランスバージョンが流れる。関連性三。繋がりは始めてやがる。信じたくはないが繋がりは始めてやがる。

俺はばあに服の上から乳首を触られる。透けているのに勃起する。信じられない。まさに摩訶不思議アドベンチャー。いや、もちろん透けている事がじゃなくてばあに乳首を触られて勃起する俺

が摩訶不思議っていうか真壁不思議。

タツタツタツタ、タララツタツタラ。音楽に合わせてばばあは俺にまたがり皺だらけのおっぱいをはだく。オーマイゴッドラブノウ
オア美智子。なんだいこれは。

俺は幽霊みたいな状態なのに勃起してばばあのおっぱいをしゃぶ
ってる。人類未踏。人類未踏勃起。やがて人類未踏力ウパ。さらに
ばばあの人類未踏フェラ。そして究極の人類未踏ばばあに口内発射。
巧すぎる。ばばあは巧すぎた。俺はくたくたになる。

ばばあが俺の人類未踏精子をお絞りに吐き出す。ウエ。ハードコ
ア。そしてさらにハードコアな事実に見付く。

お絞りをテーブルに置くばばあの手首はギザギザだった。

関連性四。何がどうなってやがる。

「すつきりしたろ？」

「ばばあ、その手首はどうした？」

「これかい？ 若い時からの癖でねえ。二十年前に旦那と結婚し
ただけどその旦那はギャンブル三昧酒三昧暴力三昧最低のうんこ
野郎だったのさ。いつしか私は……」

「ばばあ、前置きはいらない。あんた、何で手首を切ってる？」

ばばあは残念そうに笑う。ばばあの手首が俺の目の前にやってくる

る。

「手首に聞いてごらんよ」

「ばばありスト。なんでお前は切られてやがる？」

俺の心拍数は上がる。どくんどくんどくん。予想通りのマザーフアッキンアンサーがきやがる。

「生きやすいからよ」

関連性五。摩訶不思議アドベンチャーが終わった。ばばあの顔は闇に包まれて消える。

言葉が聞こえる。

「すっきりしたら、思い出してごらん。初めからでもいいし、遡ってもいい。お勧めは遡りだね。あんたの答えは、意外と近くにあったのさ」

そう言えばいつになく頭がクリアだ。さすが人類末踏発射。俺は思い出す。

いゝつのことーだかー思い出してごらん、あんなこと、こんなこと、あったーでしょ。

手コキ風俗のーこと、美智子に会ったこと、キャッチに連れてかれたーこと、キャッチがラブノウだったこと。いゝつになあーっても……。

……？

キャッチがラブノウだった？

いーつになっても、忘れないで。

俺の全身に鳥肌が立つ。摩訶不思議アドベンチャーは終わってない。まさか、いやいや、薄々と感じてはいたような気がする。

慶太郎の声が響く。

「そんな事にも気付かないから」

早太郎の声が響く。

「お前は俺達になれないんだよ」

親父の声――亡霊の声が聞こえる。

「真壁の恥さらしが」

うるせえ人間の恥さらし共。てめえらまとめて俺が切り刻んでやる。俺の中で溢れる気持ち。何もかも、片っ端からジェノサイド。もちろん、その前に、あと一步の所まで迫る真実をがつつりキャッチしなきゃならない。

悲しくて泣きそうだ。でも俺は泣かない。もう泣かない。美智子の馬鹿め。泣いてやらねえ。

言っただでしょう？ 真壁は優しすぎるのよ。

そして俺は風になる。真実は見えてるようで見えてこない。ただ推測は出来る。その推測が正しかったとしたら俺にとつては致命的なファッキングアンサーだ。だから風になる。ビューッと吹き抜けてさっさと終わらず。痛みは少ない方がきつといい。

体がダルい。俺は再びいつの間にか生身になっていた。頭も痛いし四肢には力が入らない。

渋谷から山手線に乗る。汗だくで顔色の悪い俺を避けるように乗客はほとんど別の車両に移っていく。

はて？　いくら顔色が悪いからって悲鳴まで上げられる覚えはないぜお姉さん。まあいいや。ガラガラになったから座る。

立つ。新宿駅。電車を降りる。東口。アルタ前。ハイタクシー！乗車拒否。カチン。ジャンプ。フロントガラスにはりつく。乗車オッケー。

「真実まで！」

運ちゃんは俺にびびってる。ミラー越しに俺の顔色を伺ってる。

「し、真実ってどこですか？」

「……町二丁目の交差点でいいや」

「わ、わかりました」

レッツゴー。新宿南口方向へ走り甲州街道へ。道は混みまくってる。勘弁してくれ。俺は急いでるんだ。早くしないと泣きそうだ。泣きそうで狂いそうだ。

「運ちゃん、ぶっ飛ばせ！」

「む、無料ですよ」

「無料？ 何がタダなの？」

「ああ、予測変換ミスです。無理ですよ」

運ちゃんもまた狂ってる。クレイジータクシー。

窓に水滴が付着しだした。霧みたいな雨がフツと降っている。何だか悪い兆候だ。隠されていく気がする。真実が隠されていく気がする。

俺は頭の中に美智子を思い浮かべる。上手くいかない。やっぱり。急がないと俺は全てを見失う。

視線を上げる。ミラー。やっぱり運ちゃんは俺の顔を、というより俺の座っているシートを気にしているみたいだ。何で？

「運ちゃん」

「は、はい」

「何か文句ある？」

「な、ないです」

「なら、よし！」

本当はよくない。でも俺に本当の事を教えてくれる奴なんて多分きつともういない。だから、俺から質問するのはもうなるべくやめようと思う。

タクシーを降りてマンションに帰る。意識が朦朧として目の前がぐらぐらしてるのに俺は律儀に集合ポストを開けたりする。

電気代とガス代の請求書が入ってるから取り出す。するとその下に茶色い封筒がある事に気付く。差出人は真壁慶太郎。破く。捨てる。本当は切り裂きたかった。

一度部屋へ帰る。ビデオデッキのスーパーエロビデオ。女子校生二十四時間野外飼育を手にとってそれからカッターを引き出しから取り出す。消毒する必要はない。大抵の必要性は消えちまった。美智子の俺に対する必要性和共に。

部屋を出る。隣の扉を叩く。

「やあ。真実は見つかったかい？」

ラブノウが立っていた。

俺は饞別のつもりでエロビデオをラブノウに渡す。

「何だい、これ？」

「本物の女子高生とヤル機会はなさそうだから、女子校生で我慢してね」

ラブノウはエロビデオをビデオデッキに挿入する。このようにして何かが生まれる。

いや、何も生まれない。

オナニーじゃ何も生まれないんだよラブノウ。

アグラをかいてラブノウはテレビ画面を見入る。陽気な音楽が流れる。ビバ・ラ・ラッサ。制服を着たお姉ちゃんが繁華街のど真ん中でスカートをまくる。下着はつけず。

俺はラブノウの背後に立って一緒にエロビデオを眺める。公衆便所の個室でお姉ちゃんがバックで犯される。アンアンイクイク。

「俺が後ろにいても抜ける？」

「特に問題はないね。君があの時みたいに邪魔をしなれば」

アンアンイク。

「怨んでた？」

「当たり前さ」

ラブノウはちんこを出す。短小で包茎でその上くっせえちんこを

出す。握る。上下に揺らす。

俺はカッターから刃を出す。

テレビ画面の向こうで、女子校生は恥辱に顔を歪めてる。男優のピストンが激しくなる。イクイクーいった。ラブノウもいった。

いか臭い。俺はラブノウの首筋にカッターを突き付ける。チエツクメイト。

「俺さ、ラブノウの事本気で友達だと思ってたんだ」

ラブノウは振り返らない。お姉ちゃんの顔面には男優の精子がガンガンにかけられてる。あるいはラブノウの精子がガンガンにかけられてる。

「前にも言っただろう？」

僕は二十七年の離れた若造を友人と思える程先進的な人間じゃないんだ。

「美智子をどこにやった？」

お姉ちゃんが顔にかけられた精子を手ですくって舐める。手首――あれ？ ギザギザだ。

「僕が美智子さんをどこかにやった？ 何の事だい」

振り返らずにラブノウは言う。振り返れば切り裂いていた。頭が痛い。体がだるい。俺は欲求を止める事が出来ない。

「美智子さんは自分で消えたはずだろう」

「だからさラブノウ」

《何でそれをあんたが知ってるんだよ》

「ラブノウが魔法で造ったのか」

「美智子さんを？ 馬鹿を言わないでくれ。僕の魔法はそんなにファンタジックなものじゃない」

手先が震える。ラブノウを切り裂きたい――美智子の手首を切り裂きたい――実のところ俺が切り裂きたいのは――。

「言葉では真実は言い表せないよ、真壁君」

「切り裂きたいのは真実だね」

「違う。切り裂きたいだけでは結果が先行してしまっている。何を、どのようにして、いかなる理由をもって切り裂きたいのか。それを説明出来ていない。そして突き詰めれば可能性は無限だ。記憶は日々風化し、新しい情報に塗り替えられる。君の切り裂きたいという欲求の原点に振り返るには、君が初めて切り裂きたいと思った瞬間に戻らなければならない。つまり――」

真実は言葉では言い表せない。然り、真実に到達する事は出来ない。

ラブノウは笑った。ちんこ丸出しで笑った。ラブノウはちんこだ

った。ちんこ野郎だった。

「お為ごかしはもう充分だよ。俺が聞きたいのは結局――」

美智子は何だったのかって事？　でいいんだっけ？

思い出せー思い出せない。言葉にならない。

美智子は俺を――愛していない。

俺は美智子を――愛している？――嘘よ。

頭の中がぐちゃぐちゃだ。まとめる。まとめる。美智子に会いたい。だから探す。答えはラブノウが持っている。

刃を首筋に押し付けた。ラブノウは笑い続けた。

「僕より本人に聞いてみるといい」

ラブノウはテレビ画面を指差した。制服で顔面精子の美智子が俺に向かって笑いかけていた。狂ってた。

テレビ画面から美智子は這いずるように出てくる。来るーきつと来る。絶対来る。出てきた。

ラブノウは立ち上がる。精子まみれの美智子の肩を左腕で抱く。ちんこ丸出して抱く。

俺はカッターを落とす。体全体が震えた。鳥肌が針みたいにとんがってる。

「言っただしょう真壁。永遠の別れじゃないって」

「大好きだよ美智子」

俺は美智子に歩み寄ろうとする。汚くて狭くてくっせえ部屋。俺と美智子の距離は限り無く近い。だけど歩み寄れない。

「まだ嘘をつくの？」

嘘について考える。俺は美智子の事を愛してる。厳然たる事実。パーフェクトトウル。何が嘘だっていつのさ美智子？

「これが証よ」

美智子は左手首を返す。ギザギザだった。血がしたたる。ラブノウー勃起してる。

「あなたが愛してるのはこれよ。私じゃないわ」

「違う。俺は美智子も美智子リストもおんなじくらい愛してるんだ」

「いいえ。あなたが愛してるのは私でも私の手首でもない」

ラブノウは首を縦に振るーその通り。

「《私の手首を切る》という《行為》だけよ」

かちんーピースがはまる。真実に到達する。イツトゥルー。そうか。ああ、そうだ。そういう事だ。

「さしずめ、リストカット・ラヴァー」

そう言ってラブノウが美智子のほっぺの精子を舐める。俺は叫ぶ。

「やめろ!!」

「何故？」

「俺はあんたを殺したくない。美智子に手を出して欲しくない」

「止めてみるんだね。これは僕にとっては復讐なんだ」

「私にとっても復讐なのよ」

美智子はスカートの外して下半身まる出しになって壁に手をついてラブノウに尻を突き出す。

「やめろ!!」

「止めてみなさいよ、真壁」

「そうさ。大切なものを守るんだろう？」

四肢に力を――入らない。抜けていくだけだった。どうしてもこんな事に？ いや、大体の事はもう解ってる。でも……。

「あんたが一番わかんねえんだよラブノウ！」

あんたは俺を助けてくれた。俺を導いてくれた。友達だった。親友だった。それなのに……！

「なんで兄貴達みたいな事すんだよ!!」

弾ける。空間がぶつとんで闇に変わる。全ては闇と共にある。大宇宙が闇に帰る。

挿入――美智子にラブノウが突き刺さる。

俺は宇宙の真ん中でうなだれる。嫌だ。嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ。

「守れ。切り裂く以外の方法で守るんだ」

そんなものは俺にはない。俺には切り裂くしかない。真壁・ザ・リップー。美智子の鼓動が大宇宙から伝わってくる。気持ちいい。してしてラブノウ。

「《俺》はそんな事望んでないんだ！」

「君の兄達は父の支配を受け入れた。そしてそのストレスを君や外部の人間に撒き散らす事で発散した」

俺にはそんな事は出来なかった。兄貴達を切り裂く事も、親父を切り裂く事も、関係のない奴らを切り裂く事も出来なかった。

「おかげで私はいいい迷惑よ真壁」

美智子は俺の事を愛していないー当然だ。美智子は手首なんて切って欲しくなかった。俺だって本当に切りたいのは美智子の手首じゃなかった。俺の手首じゃなかった。

「でも生きやすいんだ」

闇の中から俺の声が聞こえた。それが真実だ。薄っぺらくておざなりにしかすぎない意味のないゴミみたいな言葉が俺にとって真実なんだ。

俺は頭をあげる。ラブノウは無茶苦茶なピストンで美智子を犯し、俺を侵している。

「僕は君の事が嫌いだ。せつかくのセックスを台無しにしてくれ
たからね」

「じゃあ、なんで助けた？」

「君という人間の本質的な部分はそれほど嫌いじゃないからさ。
僕も人間だからね。ある程度の矛盾は抱えている」

「美智子はあるが俺に見せた……」

「そういう事だ。彼女は存在していない。そもその初めから」

そりゃあ捜しても無意味なわけだ。俺は笑った。ラブノウに侵されながら笑った。

「んで、ラブノウの気は済んだ？」

ラブノウは答えない。それが答えだった。

大宇宙でラブノウと美智子は巨大化していく。俺は蟻のように二人のセックスを眺める。後ろからラブノウは美智子をつく。ピストン。幻影的で偉大。グレイト振るセックス。

俺はもう動けない。何もかもがどうでもよかった。だって美智子の言うとおりだ。

俺は美智子を愛していない。愛そうとただけだった――愛せなかった。

手首を切ると美智子は俺を求める。美智子は俺だった。俺の幻だった。自分を傷つける事しか出来ない臆病者の俺のよりしろだった。

俺は死にたくなかった。でも死にたかった。兄貴達みたいになんたかった。でもなれなかった。自分以外の全てを破壊して親父からのプレッシャーを相殺する兄貴達にはなれなかった。

親父を憎んだ。兄貴達を憎んだ。兄貴達になれない俺を呪った。だから俺は――。

貰けなかったカッターで俺自身を切り裂いた。長い間。俺は俺を憎んでいた。美智子を憎んでいた。

「私は真壁のお兄さんじゃないわ」

知っていた。それでも俺はやめられなかった。

「生きやすいならやめる事はないわ」

「そうとも。生きやすいならやめる事はない」

俺は続ける――切り裂き続ける。手首が千切れるまで。俺が死ぬまで。

「しかしそれは矛盾している」

ラブノウは美智子の尻を叩く。スパンキング。あるいはスパークング。

「君は生きたいはずなんだ。生きたいからこそ、手首を切れば切るほどに性欲を促進させる」

「そうよ真壁。優しすぎるわ」

俺は矛盾している。その矛盾が俺を狂わせる。

美智子は時間通りきつちりやってくる。七時に待ち合わせ――美智子が出てきたのは八時。

「ーちなみに俺の部屋にはテレビもないー何故ビデオデッキがある？」

「それでも真壁が続けたいなら、私は別に構わないわ。ただ、もう付き合いきれないの。だから、これはあなたに返すわね」

巨大化した美智子の手首が破裂して血しぶきが水玉になって大宇宙をたゆたって俺を包み込む。俺の手首はギザギザになる。心地良い痛みーグレイトフルペイン。

「ラブノウ、俺はどうなる？」

「さあね。少なくとも、僕の気の済むまでは犯し続ける。それについては美智子さんも了承済みだ」

喘ぎ声。美智子は俺をなぶるのが心底楽しそうな表情をしてる。俺は俺を苦しめるのが心底楽しそうな顔をしている。

「限界だったみたいだね。君は、《君》自身に憎まれている。当たり前さ。怒りをぶつける矛先を間違えた。赦されないよ。もともと《君》を憎みだしたのは君の方だったのに今更愛したいのかい？馬鹿を言っちゃいけない。いつまでも美智子さんに甘えるのはよくない」

「そうよ真壁。よくないわ」

「なんで俺を導いた？」

「君がパンドラの箱を開けて、絶望するのが見たかった。君を苦しめたかった。初めて君に会った時、美智子さんに頼まれたんだ。」

いや、《君》に頼まれたと言ってもいいね。私を真壁に会わせて、私に真壁を苦しめさせてー。こんな具合にね」

ピストンのスピードが増していく。ラブノウ、フルスロットル。俺は愛していない。美智子の事も俺の事も、親父の事も兄貴達の事も。世界中に存在するありとあらゆるじじいやばあ、親父や兄貴達の幻影を俺は憎しみ続けている。

とりわけ、俺を憎しみ続けている。

「さあ、守ってみるんだ。無抵抗の人間をいたぶっても面白くない。僕は君が嫌いだ。美智子さんも君が嫌いだ。この大宇宙で君を好む者は誰一人として存在しない。君は世界から呪われている。悔しくないか？ 悔しかったら僅かにでも抵抗してみるんだ」

手首から俺の力は抜けていく。全てがどうでもよかった。もう俺は眠りたい。忘れてしまいたい。死んでしまいたい。だがしかしー！。

前にも思った。

俺は眠るわけにはいかない。

俺は死ぬわけにはいかない。

何故？

大宇宙に兄貴達の顔が浮かんだ。天上世界から奴らは俺を見下し、嘲る。お前は俺達にはなれないー大宇宙にこだまする呪詛。

怒りが憎悪とミックスされた。もう一度ビッグバンを起こす。世界を俺色に染め上げる。兄貴達を殺す。兄貴達を切り裂くまで眠るわけにはいかない。兄貴達を切り裂くまで死ぬわけにはいかなかった。

ラブノウが呻く。いきそうらしい。俺も勃起した。美智子は何度もいっていた。

手首に尋ねる。まだ大丈夫か？

手首は答える。

「まだ大丈夫。今度からは、もっと上手く切るのよ？」

「安心しろよマイ手首。俺は二度とお前を切らない。俺が切り裂くのは」

天上を見上げた。兄貴達は仲良く俺を嘲り続けていた。おぞましいー呪わしい。

「ラブノウ、ごめんね。セックスの邪魔して悪かった。俺行くよ。美智子、今まで本当にごめん。俺、やっぱり美智子の事好きじゃなかった」

全能の美智子。俺にとっての神様。俺の事を何でも知ってるー俺なのだから当たり前だった。俺なのだから絆が生まれるはずもなかった。

「いいわ。私はそもそも初めから、あなたに気付いて欲しかっただけだから」

「僕は赦さないがね。君は僕がようやく見つけた恋人を僕から切り離してくれたんだ。君から美智子さんを完全に奪うまで復讐は終わらない」

「あの出会い系の女子高生？」

「そうだ。」

君は僕が魔法を使って彼女を強姦しようとしていたと思ってるらしいが、それは勘違いだ。

僕は彼女の中の《美智子さん》とセックスしていたんだよ。

僕は今まで数百の《美智子さん》と交わってきたが、あの女子高生に勝る《美智子さん》はいなかった。

あの女子高生も君と同じようにリストカット癖があつてね。

《美智子さん》はそれを大層憎んでいた。僕は憎しみを伴うものしか愛せない。何故なら僕が憎しみの塊だからだ。こんな魔法を持つて生まれてきたせいで、僕は口々に生身の人間と関われなくなったのさ。君に解るか？ 人の心の中が覗けるという事がどれほどの苦痛を伴うか。僕だつて見たい訳じゃない。見えてしまうんだ。見えてしまうと、もう止まらない。止まらないんだ」

ラブノウは泣いた。兄貴達は笑った。ラブノウは美智子を突き飛ばした。美智子は倒れた。

「だから、僕は人の心を犯す事を始めたんだ。生身の人間とするセックスより数段いい。愛だつて深い。絆だつてー」

ラブノウは顔を塞いだ。絶望が《俺》の宇宙に染み渡った。

絆というのは何も知らないからこそ強固なんだーラブノウは何

でも知っていた。ラブノウは誰よりも孤独だった。

「ごめん、でも、俺、ラブノウの事好きだったよ」

「知ってるさ。だから僕も君の本質的な部分は嫌わなかった。嫌えなかった。情けない事に、生身の人間に好かれたのは初めてだったからね」

俺はラブノウの事を情けないとは言えない。俺とラブノウは同じだった。実の親父や兄貴達に疎まれ、蔑まれ、呪われた俺を好む人間などいなかった。いつも虫けらやダンボールを切り裂いている俺に近寄ってくる人間はいなかった。

俺とラブノウは兄弟だった。双子だった。

「だから、手を貸してくれたんだね」

小さくなっていくラブノウ。美智子もまた小さくなる。代わりに俺が巨大化する。

「ありがとう、ラブノウ。んで美智子。俺、やったるわ」

伸びていく。天上まで。この狂った宇宙の創造神のところまで。俺は奴らに教えてやる。お前らが作ったのは宇宙なんかじゃない。ただのちっばけなプラネタリウムだって事を。

手首が痛む――痛みは消せる。

眼下――美智子が光っていた。美智子はカッターに変身して俺の手元に飛んできた。真壁・ザ・リッパ―と美智子・ザ・カッター！。

最強のコンビが生まれた。

創造神の嘲りー慶太郎と早太郎の顔。他者を見下す事しか考えない親父の分身。

俺は美智子に言う。大きくなれーカッター型ソード誕生。

剣を振った。兄貴達の顔を真つ二つに切り裂いたーロスト意識。

ラストカット

意識の断片を繋ぎ合わせて覚醒しようとする俺。暗闇の中には何もない。誰もいない。オール闇。つまりダークネスイズオール。

俺は闇を爆発させる。真壁ビッグバン。このようにして宇宙が生まれた。

目が覚める。悪魔が俺を見下ろしていた。

「久しぶりだな、尚太郎」

白衣の慶太郎は俺に笑いかけた。俺は視線をそらす。消毒薬の匂いがした。ここは病室だった。

「危なかったな。もう少し見つかるのが遅かったらお前は死んでいたよ」

布団から左手首を出す。包帯がぐるぐる巻きにしてあった。

「軽いニユースにもなったらしい。タクシーのフロントガラスに血まみれで飛びついたらしいな。相変わらず呆れた奴だ」

俺は上体を起こす。病室は六人部屋らしかったが、患者は俺だけだった。窓際のベッド。外には高層ビルの群れが見える。夜に光っていた。

「誰が俺を見つけたんだ？」

「オカマだよ。佐藤とか言っただけな。今、待合室で軒をかい
る。信じられないおっさんだ。お前を背負って、お前のマンション
からここまで走ってきたんだぞ」

佐藤さんは俺を見捨てたわけではなかった。ごめんねありがと佐
藤さん。今度キスくらなら許してあげちゃう。

「もうしばらく休め。じきに早太郎もやってくる」

俺は慶太郎を睨んだ。

「何しにきやがるんだ」

「決まってるさ。可愛い弟が死にかけたんだ。兄としてほっとけ
ないだろう？ リストカットもほどほどにしておけよ。あまり兄さ
ん達を心配させるな」

肩を叩かれた。左手で振り払った。痛みが走る。

「さわんな」

「嫌われたものだな」

「お前らを好きな奴なんているのか？」

「さあ？ そんなくだらない事考えた事もないな」

慶太郎は扉にむかった。扉を開けた。俺に振り返った。

「手紙は読んだか？」

「切り裂いた」

「まあ、今となつてはどちらでもよかったんだが」

慶太郎の視線は俺じゃなくて宙に漂つてた。虚ろ。

「さつき、親父が死んだ」

目眩がした。親父の亡霊が俺に囁いた。

「真壁家の恥さらしめ。お前が死ねばよかったんだ」

俺は笑った。狂つたように笑い続けた。

ざまみろ人間の恥さらし。あの世でほぎけ。わめけ。いくらでも言つてろ。俺は最後までお前の思い通りにはならなかったぜ。ファザーファッカー。幽霊の罵詈雑言なんてノーダメージだ馬鹿やろう。

亡霊の声は消えた。さすが俺。ゴーストバスター真壁。

扉の閉まる音がした。慶太郎が病室を出た。

窓から光が射し込んでくる。ガキの頃、いつも俺は部屋の片隅でこの光を恐れていた。震えていた。

完全な暗闇で俺を隠して欲しかった。そうしなけりや兄貴達に殺されると思った。だから俺は夜に光るものが嫌いだつた。

でも、今はどうだろう。俺は光を拒んでいない。受け入れ始める。俺は立ち上がった。窓を開けて身を乗り出した。

新宿の光を全身に浴びた。俺の宇宙に惑星が生まれた。俺の宇宙に地球が生まれた。

親父が死んだ。兄貴達はこれからどうするんだろう？ 誰の支配を受け入れ、誰にそのストレスをぶつけるんだろう？

慶太郎の空虚な視線――腑抜けていた。恐らく早太郎も同じだろう。あいつらは双子だ。双子じゃないけど双子だ。魔王が生んだ暗黒の双生児。魔王がいなければ生きていけない。

俺は奴らと兄弟なんかじゃない。俺は親父の息子なんかじゃない。真壁の血はもうたつぷり垂れ流してきた。ネオ真壁。ネオ宇宙。新しい日々が始まる。

俺は一人でも一人じゃないから生きていける。ああそっか。俺、あいつらより優れてるじゃん。

睡魔が押し寄せてきた。眠いけど眠れない睡魔じゃなくてマジで泥のように眠れるタイプのマッド睡魔。

眠る前に決めておこう。俺は魔王が残した悪魔二人をどうするベきか。腑抜けになったぬけがらデビル。ネオ真壁尚太郎なら簡単に切り裂ける。

掌を夜風に晒した。カッターが掌に落ちてきた。

「俺はどうしたいんだろう。あいつらを切り裂きたいのかな？」

夜に尋ねる。ラブノウが答える。

「言葉では真実は言い表せない。何故なら言葉というのはその一つが真実という膨大なパズルのピースの欠片でしかないからさ。つまりね真壁君。僕が君に言いたかった事は」

難しく考えるな。考えたって意味なんかないんだよ。答えなんて初めから存在しない。だから、もっとイージーに生きてみるんだー！。

「オツケーラブノウ。アンドサンクス」

俺はカッターを夜空に放り投げた。宙に舞うカッターに向けてチヨップで切り裂くジェスチャーをする。カッターは闇に消えた。

俺は足がふらふらでくたくたでぐだぐだだった。ベッドに倒れ込んで目を閉じて眠る。現実が夢に変わるちよっと前、美智子の声が聞こえた。

「実は、一つだけ嘘をついていたの」

「何だい？」

「あなたの事、ほんの少しだけだったけど」

美智子の声が掠れる。俺から美智子が完全に消えようとしている。

「好きだったわ」

一筋の涙が頬を伝った。何もかもが夢に変わった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2276b/>

リストカット・ラヴァー

2010年10月9日21時37分発行